

平成25年8月17日 於：山口市湯田温泉 ホテル松政

# 第9回 総会・懇親会開かれる



第33号  
発行・鴻文会

山口大学 文理学部文文学科・  
人文学部・大学院人文科学  
研究科 同窓会

(事務所)

〒753-0831 山口市平井773-2

沖田ビル202

電話・FAX 083-928-4527

郵便振替口座 01500-4-15902

http://

homepage3.nifty.com/koubun/

メール: fycsf998@ybb.ne.jp



周防の山々の麓、同窓生集う！ (最前列中央に丸本卓哉 山口大学長)

## 会長挨拶

### 大学同窓会とは？

―「会長引き続き」のご挨拶に添えて―



会長 岡光 一浩

今年も残すところあとわずかとなりましたが、会員の皆さまには、お変わりなくお過ごしのことと拝察いたします。第九回の鴻文会総会も、旧・現教員や多くの卒業生の出席に加え、来賓として丸本卓哉山口大学学長はじめ、大学の他同窓会からのご出席もいただき、八月に盛会裡に終えることができました。ご出席いただいた方々、ご尽力いただいた方々に心からお礼申し上げます。

さて、今回の総会で、再び会長をお引き受けすることになりましたが、総会では、はしなくもという思いの強さのため、物言いのとがたご挨拶になってしまいました。謹んで深くお詫びいたします。微力ながらこれからの四年間、鴻文会の存続・発展のためにしっかりと事を為す所存でありますので、会員の皆さまにはなにとぞお許しをいただきますよう、引き続き、ご協力とご支援をいただきますよう、お願い申し上げます。なお、今回の総会の様子等につきましては当会報の報告や別記の「鴻文会、この一年」でもご覧いただけますので、ここでは、同窓会というものについての、私の希望めいた思いを綴ることで、「会長引き続き」のご挨拶に代えさせていただきます。

これまでの四年間の会長職の中でいつも頭をめぐっていたのは、なぜ同窓会なのか、同窓会とはなにか、つまり、必ずしも多くの卒業生が望んでいるわけではない同窓会の存在意義とは

なにかという思いでした。同窓会の存在目的については、我が鴻文会の会則にも、「本会は会員相互の親睦をはかり、山口大学人文学部の発展に寄与すること」と記されています。同窓会の重要な役割が、会員間の親睦と母校支援にあることは申すまでもありません。しかし、そこには説明が必要でしょう。その、会員間の親睦や母校支援をどのような意味と方向づけをもって行うか、ということですが、そうした問題意識をもつことは、とりわけ大学同窓会には求められているように思います。

ただ楽しかっただけではないのに、あの日のあの顔と顔を合わすだけで懐かしさがこみあげてきて、なぜか心からの喜びに包まれます。つらい苦しい時を忘れようとしてバランスをとる人間の習性がそうさせているのかもしれないが、とりわけ青春へのノスタルジアは今を忘れさせ、過去を喜びとしてしばしば現出させます。私たちが進んであの日に誘われるのもそのためでしょう。同窓会という装置は、複製ながらも、あの日、あの顔、あの場所を三点セットとして整え、過去を単なる流れる時としてではなく、特別な感情のしみ込んだ時を生き生きと甦らせ、言葉には言い尽くせない雰囲気や気分までも再生してくれます。しかし同窓会は、過去を感動として思い起こさせるだけのものではないようです。藤子・F・不二雄の漫画『パラル同窓会』が描くように、同窓会で語られるそれぞれの人生は、私たちに、自分や自分の人生物語の似姿であることを確認させます。同窓会とは、今までの自分を思い起こして自分を知り、これからの自分を考え、自分とはなにかを確認し再構築する場でもあるのです。

同窓会は、かつての良き時代を思い起こし感慨に耽るだけでなく、それ以上の効用を私たちにもたらしてくれれます。社会を動かすダイナミズムとは違ったところに形成されている同窓会、自分とは異なる経験や情報をもった同窓会年代を超えて集う同窓会、そうした同窓会のもつゆるやかに、私たちは自分を振り返り、本当の自分とはなにか、社会とはなにかに気づき、自分の心の奥底に眠っている希望を見つけ

ることができるとは、必ずしも幸せとは言えない現在の社会全体の閉塞感の続く中で、私たちは未来に向かってどう動くのか、そのヒントを同窓会は差し出してくれませんか。同窓会のもつゆるやかな関係に秘められた繋がりや絆は、私たちに新たな生きる希望を与えてくれるのです。自分と違う生活環境の中にある同窓とゆるやかに繋がる同窓会、そこに私たちは逆境の中でどう生きるかの示唆を得ることができるとは思っています。

次に母校支援についてですが、同窓会が大学に対して行う支援、それは単に経済的援助に留まるものではありません。それは、大学が大学としての役割を果たすための支援でなくてはなりません。ではその、大学の役割とはなにか、そのことを詳らかにする能力も紙幅も今の私にはありませんが、立教大学の吉岡知哉総長が大学院を修了する学生に向けて語った、「徹底的に考えること」で大学は社会において存在することが認められ、かつ許されているのだということが言葉の中に、その答えを端的に見つけることができます。そしてその言葉は、「考える」という営みは既存の社会が認める価値や前提や枠組み自体を疑うという点において、本質的に反時代的・反社会的な行為」であると続きます。

ここには大学の役割が、「いまあるもの」のみを選択肢として選ぶのではなく、「いまあるもの」を組みなおして「いまないもの」をつくりかえるべく「徹底的に考える」ことにあることが語られています。

しかし、大学の現状はどのようなのでしょうか。大学のキャンパスには久しく、個性や伝統を呑みつくす妖怪が徘徊していると言われていました。とりわけ東日本大震災とその後の原発事故以後、「徹底的に考える」ことよりも、すぐに役立つスキルや技術が求められ、反知性主義が力を増しつつあります。また大学には、企業と同じように一律のものさしで大学を格付けしようとする「グローバル化」への取り組みが強いられ、その取り組みに応じて交付金が配分されるという国の脅しに、大学は、本来の役割もそつちのけで必死にならざるを得ない状況にあ

るようです。まことに悲しむべきことで、大学の存在根拠とはなにかを考えさせられます。でも、現実を言い訳して理想を退けていては、大学が変わらないの言うまでもありません。

私は四年前の新会長挨拶でも、同窓会での親睦が私たちに、閉塞感に覆われている現実社会の中で私たちが勝ち得るのとは違ったレヴェルの達成感・幸福感を与えてくれるのではないかと、そして母校支援についても、大学自体がなし得るのとは同じでない、あるいは、大学がなし得るのが困難な、そうした、大学とは違った発想レヴェルで寄与・貢献をすることが同窓会の母校への寄与・貢献である、と書いています。私は微力ながら、鴻文会が私たちに、時計の針の指す物理的時間ではなく垂直な心の時間を、すなわち、クロノスの時間ではなくカイロスの時間を提供し、その場が単なる空間でない、人それぞれの「場所」となり得るように努めていきたいとつねづね考えております。そんな同窓会のもつ経験知は、生きていく私たちの、そしてこれからの大学の財産となり得るはずだと信じているのです。

(文理第一四回卒・ドイツ文学)



大学正門

## 鴻文会会則

(昭和五六年一〇年三十一日制定)

### (総則)

- 第一条 本会は鴻文会と称し、事務所を山口市平井七七三―二 沖田ビル二〇二におく。
- 第二条 本会は会員相互の親睦をはかり、山口大学人文学部の発展に寄与することを目的とする。

第三条 本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

1. 会報及び会員名簿の発行
2. 会員相互の連絡、親睦の増進
3. その他必要と認められる事項

### (会員)

#### 第四条

1. 正会員 山口大学文理学部文学科卒業生、人文学部卒業生、文学専攻科修了者及び大学院人文学部研究科修了者
2. 準会員 山口大学人文学部学生及び大学院人文学部研究科院生
3. 特別会員 山口大学文理学部文学科旧教員、人文学部教官及び旧教官

### (会費)

第五条 本会の経費は、会費、寄付金、その他の収入をもって当てる。正会員は終身会費

一〇、〇〇〇円を納入する。準会員は入学時において上記の終身会費を納入する。

第六条 本会は次の役員をおく。任期は四年とし、再任は妨げない。

1. 会長 一名
2. 副会長 二名
3. 委員 若干名
4. 監事 二名

第七条 役員は次の職務を行う。

1. 会長は本会を代表して会務を総括し、副会長は会長を補佐する。
2. 会長、副会長及び委員は委員会を組織し、会務を処理する。
3. 監事は会務及び会計の執行を監査する。

第八条 委員会は名誉会長に人文学部長を、顧問に人文学部経験者(本会正会員)ならびに会長経験者を、また会務運営のために幹事若干名を委嘱することができる。

第九条 総会は四年ごとに開催し、次の事項を審議して出席者の過半数をもって議決する。

1. 事業の報告
2. 会計報告
3. 役員を選出
4. 会則の改正及びその他の重要事項

### (支部)

第十条 会員は本会の事業を推進するため、必要に応じ支部を設けることができる。

### 附則

この会則は昭和六〇年一月二日より改正施行する。

この会則は平成九年八月二三日より改正施行する。

この会則は平成二五年八月一七日より改正施行する。



総会 会長・副会長の挨拶

第九回鴻文会総会・懇親会報告

副会長 兼清 仁志

オリンピックと同じく四年に一度の鴻文会総会は、公開講演と懇親会を併せて、平成二五年(二〇一三年)八月十七日(土)、山口湯田温泉「ホテル松政」二階「芙蓉の間」で開催されました。

総会は一三時三〇分から、遠くは愛知県・長崎県からの出席者を含む会員約五〇人が出席し、村田博監事の司会で総会行事が進められました。

岡光一浩会長あいさつに始まり、鴻文会名誉会長である根ヶ山徹人文学部長のあいさつに続いて、議長に田中晋氏を選出し議事に入りました。

最初に岡光会長が四年間の鴻文会の事業及び山口大学同窓会理事会並びに山口大学創基二〇〇周年事業の報告を行い、宮藤隆夫副会長の会計報告、村田監事の監査報告、会員からの質疑を経た後に、本事業について異議なく了承されました。

次に、鴻文会会則第一条に記載の事務所の設置場所を「山口大学人文学部」から「現地所」に移転する会則改正について岡光会長から提案・説明があり、この件も会員の質疑の後、異議なく了承されました。

続いて「役員改選」の議事に移り、原口公康委員が新役員(案)を読み上げて、再任された岡光一浩会長以下別掲の新役員が選出され、今後四年間鴻文会を運営する新役員体制が決まりました。最後に岡光会長が会長継続にあたって、鴻文会に対する思いと所信を表明して総会は無事閉会しました。

総会終了後、一五時から一時間の予定で公開講演が開催され、今回は鴻文会会員で熊本大学教授徳野貞雄氏(昭和四九年・文理二回卒)を講師に迎え、『今、農山村に吹く風』と題して講演がありました。「道の駅」の命名者であ

る氏の講演には会員以外の聴講者も多くあって、徳野氏の社会学者として、行政とは視点の違う社会分析と卓見に時間が経過するの忘れず、聞き入ったのでした。

公開講演会終了後、ご来賓の方や特別会員の先生方とともに記念写真を撮影し、一六時三〇分から二時間の予定で懇親会が行われました。

懇親会は兼清仁志・渡邊早苗・中村稚恵利の三人が進行を行い、鴻文会元会長で現顧問の大塚博久氏あいさつに続いて、ご来賓・特別会員を代表して丸本卓哉学長の祝辞を頂戴し、ご来賓・特別会員の紹介があった後、根ヶ山文学部長の乾杯の音頭で再会の笑顔あふれる宴会が始まりました。

四年ぶりの懇親会には、山口大学ブランド日本酒「長州学舎」が用意され、会の余興として行われたスリッパ卓球では、景品のプレゼンターとして山口大学キャラクター「ヤマミィ」が登場するなど盛り上がりつつ雰囲気の中で、恩師や友人との旧交を温める光景がこちらこちらテーブルで見受けられました。



懇親会 スリッパ卓球

会の終わりが近づき、山口大学学生歌を二番まで高らかに歌った後に、岡光会長のあいさつ

と万歳三唱で二時間を短く感じた懇親会は幕を閉じ、満足そうな表情の会員は会場を後にしたのでした。なお、その後に、社会学専攻・英文学専攻・独文学専攻はさらに研究室主催の懇親会に引き継いだとのことでした。

(文理第二五回卒・中国哲学)



ヤマミィから卓球勝者にプレゼント♪

鴻文会役員

平二五・八〜平二九・八

名誉会長 根ヶ山 徹(人文学部長)

会長 岡光 一浩(昭四一年卒・ドイツ文学)

副会長 内田 光邦(昭四二年卒・英米文学)

兼清 仁志(昭五二年卒・中国哲学)

顧問 和田 敏英(昭二八年卒・英米文学)

委員

大塚 博久(昭三一年卒・中国哲学)  
大野 光生(昭三一年卒・中国哲学)  
田中 晋(昭四一年卒・英米文学)  
添田建治郎(昭四四年卒・国文学)

赤梨 和則(昭四二年卒・西洋哲学)  
兼清 仁志(昭五二年卒・中国哲学)

原口 公康(昭六三年卒・日本思想史学)  
浅川 均(昭六〇年卒・国史学)

山本 達夫(昭六〇年卒・西洋史学)  
昭六二年院修了)

斎藤 禎(昭六一年卒・東洋史学)  
昭六三年院修了)

林田 徳夫(昭五七年卒・社会学)  
和崎 睦子(昭六六年卒・社会心理学)

大谷 泰子(昭一三年卒・社会情報論)  
正分あゆみ(昭一六年卒・博物文化論)

青島 啓(昭一〇年卒・博物文化論)  
平一八年院修了)

藤井 浩子(昭二五年卒・中国語学中国文学)  
中村 匡宏(昭九九年卒・英米語文化論)

池田 容子(昭九九年卒・英米語文化論)  
平一三年院修了)

井上 恵(昭五五年卒・ドイツ語学)  
ドイツ文学)

浅野 靖(昭五七年卒・フランス語学)  
フランス文学)

中村稚恵利(昭一三年卒・言語情報論)

監事

村田 博(昭四二年卒・社会学)

渡邊 早苗(昭五九年卒・西洋史学)

学内委員

本田 義昭(昭四七年卒・ドイツ語学)  
ドイツ文学)

根ヶ山 徹(昭六〇年卒・中国語学)  
中国文学)

村田 裕一(昭三三年卒・考古学)

## 総会公開記念講演要旨

# 『今、農山村に吹く風』

熊本大学文学部教授 徳野 貞雄



今日は、恩師の木下謙治先生が居られる前で話さなければならぬので、非常にドキドキしております。まるで卒論の口頭試問のような心境です。木下先生や故山本陽三先生に連れられて、中国・九州の農山村の集落調査に行った日々が鮮明に思い出されます。

今は、逆に熊本大学の地域社会学研究室の院生・学生を引き連れて、「T型集落点検」と言う調査手法を学問的武器に、各地の農山村を飛び回っております。やはり、調査は好きだし楽しいです。調査を好きだといえる学的基盤を育てていただいた両先生には、心から感謝致しております。

昔も現代も農山村は、表面的には厳しいです。特に『限界集落』と言ったキーワードが、元高知大学の野見先生の学術的意図を離れて、マスコミや行政・研究者にもはやされて『社会的限界集落』化しつつあります。「人口減少・高齢化・少子化・農業の衰退・公共交通が不便」となると、マスコミ・行政がこぞつても、この集落は「限界集落だ!」、「消滅するかもしれない。大変だ!」とラベリングして記事を書きます。そうなると、集落の住民も「ここは限界集落だから、もうだめだ!」という悪循環に陥っている事を『社会的限界集落』化と言います。今、農山村にこの『社会的限界集落』の嵐が、吹き荒れています。

農山村で実際消滅した集落は非常に少ないです。三〇年前から「ここは将来一〇年後には、消滅するかもしれない」と言われた集落が、現在でも数多く残っています。実際、中山間地域で消滅した集落の多くは、①金山・銀山などの鉱山、②発電所やダムなどの開発場所、③営林署が栄えていた所、そして④戦後満州からの引揚者の開拓集落がほとんどです。大分県日田の

中津江村や、長崎の軍艦島などがその代表です。明治時代に金鉱や炭鉱が発見されて、産業資本の注入によって急激に人口が増加し、山・海の中に都市が形成されました。そして閉山と共に人口が激減した都市を、場所が山の中にあるから農山村の消滅集落と呼んでいます。

確かに、現在農山村の人口は減り、高齢化は進み、少子化も進行しています。だからと言って、人口減少や高齢化は社会にとって悪い事でしょうか。バースコントロールが効かずに人口が爆発していた大正・昭和前期の庶民(農家)の暮らしは、子供を食べさせるために非常に苦しかったと思います。だから、農地を求めて、食料を求めて朝鮮や満州を侵略したのです。私の父母や祖父母の時代は、兄妹が七人八人はざらでした。生活は厳しかったでしょう。皆さん方は、何人お子さんを育てられましたか?二人か三人でしょう。多くても四人までです。皆さんが、日本の人口を減らした張本人です。でも、二人三人の子供しか育てていないからと言って、人生を後悔している人がいますか。今お母さんたちは、子供の数が減ってホッとしています。しかし、少子化や人口減少では、将来の日本の社会や経済発展に悪影響が出ると思います。とやかに「正論」を主張する人がいます。だいたい五〇歳代以上の経済的階層の高い人に多いです。しかし、国家や行政が、トヨタやパナソニックなどの企業が子供を産んで育てることは出来ません。子供を産み育てられるのは家族だけです。だから、絶対に人口は減ります。「人口減少を前提にした経済・社会のあり方」を考えるべきです。

同様に、社会の高齢化は年金や医療費の高騰に繋がると言う経済的視点から、高齢社会を単純にマイナーな社会として捉える人が多いですが、高齢社会と言うのは、誰でもが八〇歳近くまで生きていけるというスバラシイ社会です。高齢化率が低い昔の社会では、二〇歳までに三分の一が死に、四〇歳までに三分の二が死に、六〇歳までにほとんどの人が死んでしまう社会です。どうも、日本全体が「命よりもカネ」のほうが大切だと錯覚させられているようです。農山村は、年を取っても生き易い社会だから、高齢化率が高いとも考えられます。また、農山村はバスや鉄道が廃止・縮小されて、公共交通機関が不便で暮らし難いところだと、思っている人も多いでしょう。だけど、現在の農山村の公共交通機関は、とくに自家用車に替わっています。車さえあれば、農山村は意外と交通の便はいいです。公共交通機関とは、「その地域、時代で最も利用されている交通手段」です。だから、江戸時代の公共交通機関は徒歩です。大正・昭和期に入って鉄道とバスが公共交通機関となりました。昭和三〇年代頃までは、庶民はほとんど自家用車を持っていませんでした。しかし、現在の農山村では、大人に一台、一家に四〜五台の車があります。農山村で車は、生活の必需品になっています。



確かに、高齢者の一部の人や一八歳未満の人は、車の免許がありませんから、いろいろ不便です。しかし、家族や知人に乗せてもらったりしています。私の調査では、熊本県の山都町では、男性の九五%〜九七%が免許を持っています。女性も五〇歳代までですと男性と全く同じです。ただ、女性の六〇歳代は四八%、七〇歳代は二八%と急激に低下します。車の免許を持っていない人は一五%です。でも、その人達の八五%は、夫や他出している子供に乗せてもらって買い物や通院などの用事をこなしてました。本当に困っているのは三〜四%の人です。でも、この人達も、いざという時には集落の知り合いに乗せてもらえます。但し、マチから来た人達は、知り合いでないので乗せてもらえません。

ここで問題なのは、行政マスコミの対応です。今でも昭和三〇年代の感覚でバスや鉄道を「公共交通機関」として位置づけて、過疎地の交通対策をしています。自分の家に車のある人は、バスや鉄道には乗りません。しかし、高齢者などの交通弱者を救う為に、対策委員会を立ち上げ、膨大な補助金をバスや鉄道に投入していますが、バスは空(エア)バスで走っています。頭を切り替えて、自家用車が「公共交通機関」だと位置づけて政策を立てれば、解決できる課題も多々あります。鳥取県の三朝町の和田集落では、集落の振興会が中古自家用車三台を買い込み、住民が自主的に運行するシステムを創っています。

最後に、今農山村のみならず日本全国で大変な混乱を起している大問題があります。それは、家族と世帯の違いが判らなくなっている事ですか?六〇歳年配の方に「貴方の家族は何人ですか?」とお尋ねしたら、多くの方が「私と家内の二人です」と答えられます。「お子さんは、居られなかったのですか?」と続けると「三人います、皆結婚して孫もいますが、マチに出て行きました。ですから今二人です。」との答えが返ってきます。それでは「お子さんやお孫さんは、家族ではないのですか?」と尋ねると、非常に困った様子で「……」になります。



講演会は大盛況!

す。現在同居して一緒に暮らしているメンバーが「世帯」で、「家族」は一緒に暮らしていないでも「家族」です。「家族」は、空間を超えて機能しています。

役場の住民台帳上の「世帯」は非常に極小化していますが、多くの人々は車で一時間以内のところに、必ず一組以上の他出している子供達「世帯」との「家族」を持っています。結婚した娘さんなどは、三日にあげず孫を連れて実家に立ち寄り、野菜やお米と孫の小遣いをせしめていきます。「世帯」は縮小していても、「家族」は立派に機能しています。

(文理第三二回卒・社会学)



懇親会 歓談の一時

山口大学同窓会/理事会

▼第一二回理事会(平成二五年一月一〇日)

ホテルニュータナカ

理事・岡光会長・北川副会長出席

- (一) 第一二回理事会議事要旨の確認について
- (二) 山口大学創基二〇〇周年事業について

- ・ 同事業のこれまでの活動報告
  - ・ 来年度シンポジウム開催予定
  - ・ 募金への協力依頼
- 理事会後、懇親会(岡光会長出席)

▼第一三回理事会(平成二五年七月二五日)

事務局二号館特別小会議室

理事・岡光会長出席

- (一) 第一二回理事会議事要旨の確認について
- (二) 平成二四年度決算報告について
- (三) 平成二四年度会計監査報告について
- (四) 山口大学創基二〇〇周年事業について

- ・ 同事業の三ヶ年プロジェクトおよびそのスケジュールの説明
- ・ 第三回山口大学創基二〇〇周年記念基幹

シンポジウム(十一月三〇日・宇部市にて予定)

山口大学同窓会寄付状況

(五) 山口大学創基二〇〇周年記念第一回山口大学ホームカミングデー開催について

- ・ 概要(案)についての説明(十一月二三日・吉田キャンパスにて予定)
- (六) その他

- ・ 学長による大学の現在についての説明
- ・ 来年度理事會会長交代

▼第一四回理事会(平成二五年一月一九日)

事務局一号館特別大会議室

理事・岡光会長・内田副会長出席

議題に先立ち、学長より大学役員の移動について、総務企画担当西田輝夫副学長の辞職に伴い、新・総務企画担当副学長に前・財務施設担当村田秀一副学長が就任、新財務施設副学長に古賀和利氏が就任予定との、報告があった。

- (一) 議事要旨の確認について
- (二) 次期山口大学同窓会会長候補者の選考について

・ 佐々木孝治会長の任期満了により、霜仁会会長の福本陽平氏を次期会長候補者とした。

(三) 山口大学ホームカミングデーの開催について

- ・ 十一月二三日第一回同開催について資料による報告
- (四) 山口大学創基二〇〇周年事業について

- ・ 山口大学同窓会寄付状況
- ・ 第三回山口大学創基二〇〇周年記念基幹シンポジウム(十一月三〇日工学部にて限研吾氏特別講演「場所の力」)

(五) その他

- ・ 学長による、グローバル関係の新学部構想についての説明

(文責 岡光 一浩)

創基二〇〇周年支援部会報告

山口大学創基二〇〇周年記念事業の実施に当たり、学長を会長とする記念事業部が設置されている。その中に、記念事業を円滑に実施するための財務支援に係る事項を検討するため、「支援部会」が置かれている。

支援部会は、昨年九月に一度だけ開催された。その状況については、昨年二月発行の同窓会報「鴻文」第三二号に「支援部会報告」として掲載している。

記念事業として、記念モニュメントや記念碑の設置、キャンパスの環境整備、山口大学基金の充実など、様々な事業が計画されている。こうした事業を計画通り実施するための募金活動が現在行われており、昨年度の会報発表の際、記念募金趣意書等を同封し送付したところである。

募金目標額は一〇億円であり、このうち七学部八同窓会(医学部二同窓会)で一億五〇〇〇万円とされている。各同窓会に対する個別の募金目標額は示されていない。また、募金期間は、平成二八年三月までとなっている。

本年七月一九日現在の同窓会関係の募金額は、八同窓会全体で、学部不明者三人を含め、募金者八三二人、募金総額二一六七万二〇〇〇円となっている。このうち鴻文会関係は、募金者五二人、募金額七〇万六〇〇〇円となっている。

(文責 宮藤 隆夫)

二〇一五年、山口大学は創基二〇〇周年を迎えます。  
ご寄付をよろしく願っています。

## ◎平成24年度事業報告

1. 正副会長会議 (5月11日)
2. 第40回役員会 (5月19日)
3. 第11回・12回山口大学同窓会理事会 (6月12日, 1月10日)
4. 第4回山口大学創基200周年記念事業企画実施部会 (7月12日)
5. 鴻理会総会出席 (7月14日)
6. 留学生奨学金授与式 (7月27日)
7. 会報「鴻文」編集会議 (9月1日, 10月26日, 11月20日)
8. 第1回山口大学創基200周年記念事業支援部会 (9月26日)
9. 会報「鴻文」第32号発行 (12月15日) および配布  
(「山口大学200周年記念募金のお願い」同封)
10. 山口大学大学院修了式・山口大学卒業式出席 (3月21日)
11. その他

## ◎平成25年度事業計画

1. 正副会長会議 (5月10日, 8月28日)
2. 第41・42・43回役員会 (5月18日, 7月6日, 9月14日)
3. 第9回総会・懇親会 (8月17日)
4. 山口大学同窓会理事会 (11月19日)
5. 会報「鴻文」編集会議 (11月9日, 11月30日, 12月未定)
6. 山口大学創基200周年記念事業企画実施部会および  
事業支援部会 (未定)
7. 会報「鴻文」第33号発行 (12月予定)
8. 山口大学大学院修了式・山口大学卒業式出席 (未定)
9. その他

## ◎平成24年度決算

収入総額	3,977,905円
支出総額	3,046,747円
残高 (次年度繰越金)	931,158円

## ◎平成25年度予算

## 〈収入の部〉

科 目	当初予算額	決 算 額
繰越金	1,571,262	1,571,262
会費収入	1,800,000	1,460,000
繰入金	0	600,000
賛助金	300,000	242,840
雑収入	8,738	103,803
合 計	3,680,000	3,977,905

## 〈収入の部〉

科 目	25年度予算額	摘 要
繰越金	931,158	
会費収入	1,800,000	10,000×180人
繰入金	2,000,000	特別会計より繰入
賛助金	300,000	
雑収入	8,842	利子等
合 計	5,040,000	

## 〈支出の部〉

科 目	24年度予算額	決 算 額
会議費	100,000	40,865
役員等行動費	100,000	38,101
事務所運営費	850,000	810,832
事務費・通信費	150,000	114,920
会報費	620,000	662,210
ホームページ維持費	50,000	23,304
分担金	151,000	150,525
寄付金	100,000	100,000
奨学金	151,000	50,630
助成金	51,000	26,840
慶弔費	50,000	28,520
積立金	1,000,000	1,000,000
予備費	307,000	0
合 計	3,680,000	3,046,747

## 〈支出の部〉

科 目	25年度予算額	摘 要
会議費	150,000	役員会、会報編集会議等の交通費、その他
役員等行動費	100,000	会長・副会長等活動費、会報編集会議等の活動援助
事務所運営費	850,000	家賃、人件費、事務所経費 (電話、電気その他)、横断幕
事務費・通信費	150,000	封筒印刷11,000枚、事務印刷、郵送、消耗品、雑費
会報費	700,000	印刷6,500部、発送5,500通、発送アルバイト代
ホームページ維持費	50,000	プロパティ・契約料、メールインスタッフ料、その他
分担金	151,000	山口大学同窓会 (手数料含む)
寄付金	100,000	山口大学教育財団「日中学術交流基金」
奨学金	151,000	留学生への支給 (手数料含む)
助成金	150,000	「同窓会等」開催助成 (手数料を含む)
慶弔費	50,000	他同窓会への祝い金、祝電、その他
総会費	1,000,000	会場使用料、講演者謝金、懇親会補助金、案内印刷・発送・発送アルバイト代等
積立金	0	
予備費	1,438,000	
合 計	5,040,000	

## 〈特別会計〉

科 目	23年度財産	24年度財産
中国電力債	1,438,657	1,465,537
定額預金	0	1,000,000
定額預金	4,550,000	3,950,000
合 計	5,988,657	6,415,537

## 〈特別会計〉

科 目	25年度財産	摘 要
中国電力債	1,465,537	東洋証券
定額預金	2,950,000	一般会計へ繰出
合 計	4,415,537	

平成25年5月15日、監査の結果過誤なく的確に経理されていることを確認します。

監 事 村田 博  
渡邊 早苗

鴻文会、この一年

会長 岡光 一浩

この一年は概して言えば、平成二五年八月一七日開催の第九回鴻文会総会の準備に関わった期間でした。同窓会の準備は、母校のある山口周辺に住むことのできる役員がその幸せをかみしめながら半ば義務として、遠くからご出席の会員の方々をお迎えすべく行うものだと思っておりますが、なかなか大変でした。しかし今、出席いただいた会員の方々が、あの日を思い出すひとときに明日への活力を呼び起こされたのであるなら、四年後をもっと充実した意味のある同窓会にしたいと考えております。その、同窓会の詳細については後に記しますが、まずは昨年末に刊行した会報について述べておきます。

例年のように、昨年九月初旬より会報「鴻文」の編集に取りかかり、一二月半ばに予定どおり第三二号を刊行しました。当号では原稿がなかなか届かないという編集委員を煩わせる事態も生じ、編集の難しさを痛感しましたが、ご覧のように、学部情報が少ないという物足りなさもあるものの、「先輩訪問」をはじめユニークで多様な記事満載で会員の皆さまの満足のいく会報となったのではないかと自負しております。原稿をお寄せいただいた方々、そして何度も編集作業のためにご足労願った編集委員諸氏に改めてお礼申し上げます。会報は現状では、会員を繋ぐ唯一と言って良い重要なアイテムです。同窓会事務局からはできるだけ多くのホットニュースを皆さまのもとへお届けするつもりですが、会員の皆さまも奮って、お気づきや投稿をいただきますよう、心よりお待ちしております。日本全国や世界のあちこちでご活躍の多くの会員の皆さまの会報への参加、そのことが会報を刊行する最も重要な意味合いです。鴻文会の発展に繋がるものです。

なお、すでにご承知のことですが、当号の会報発送時には、大学の依頼により「山口大学創基二〇〇周年記念募金のお願について」とい

う冊子も同封いたしました。なにとぞ、会員の皆さまのご協力をよろしくお願いいたします。当会報にも記されていますように、鴻文会も二〇一五年六月開催予定の山口大学創基二〇〇周年式典に関する企画や支援等の会議に出席して、その検討に加わっております。

さて、四年に一度の同窓会総会は鴻文会にとつての一大イベントです。役員会では、なによりも多くの会員の皆さま方の出席が可能になるようにという配慮のもとに、時期や場所、内容等を早くから慎重に協議を重ねてまいりました。時期についてはこれまでの同窓会同様、最も会員の方が参加しやすい時期ということで八月のお盆前後を、場所については遠くから久しぶりにお越しただける会員の皆さまに大学の雰囲気を感じてもらっていただけるということで大学会館を予定しました。しかし諸般の事情により、結局は八月一七日に湯田温泉の「ホテル松政」ということになりました。当日の総会には五〇人を超える出席者を迎えることができましたが、日時・場所ゆえに、お越しただけなかつた方々には心からお詫びいたします。次回はより多くの出席者をお迎えできるよう、検討を重ねてまいります。

同窓会総会の具体的な次第等の準備は、五月一八日の定例の役員会と七月六日の前準備を兼ねた役員会の協議を経て進められ、総会での協議案件、徳野貞雄熊本大教授への公開講演の依頼、懇親会での歓談の間の出し物、山大キャラクター・ヤマミイの出演、山大学生歌の合唱などを予定しました。その同窓会当日の総会協議や公開講演会、懇親会などの様子等については「同窓会報告」でご覧いただけますので、ここでは、当同窓会で新役員の選出を行ったこと、これまでの連絡事務局を正式の事務局とする会則の改正を行ったことのみを皆さまにお知らせしておきます。遠くからご出席いただいた会員の皆さま、準備や司会進行等にかかわった役員の方々、有難うございました。心よりお礼申し上げます。

なお、同窓会後の九月一四日、新役員による第一回の役員会を開催し、総会の総括および平

成二五年度の事業の具体的な実施方法、会報のための企画などについて協議を行いました。また、会報には研究室同窓会や同期会開催の報告が多く掲載されていますが、鴻文会ではそれらの開催に際して助成を行う制度を始めておりますので、開催の際には、会報掲載の要綱をご覧のうえ、奮ってお申込み下さいますよう、ご案内いたします。さらにもうひとつ、今年度は留学生奨学金授与の該当者がなかつたことを申し添えておきます。

最後になりましたが、昨年度まで役員としてご尽力いただきました方々、とりわけ北川健・宮藤隆夫両副会長に心よりお礼申し上げます。こころならずも、引き続き会長を務めることになりましたが、役員の方々の力をお借りして鴻文会の発展のために微力を尽くしてまいりたいと思っております。なにとぞ、これまで同様、よろしくお願いいたします。

(追記) 今(十月二十六日)、ショッキングなニュースが飛び込んできました。鴻文会役員としてご尽力いただき、とりわけ学部情報の伝達をしていただいた磯部佳宏先生が突然お亡くなりになったとのこと、誠に残念です。心からご冥福をお祈りします。

(文理第一四回卒・ドイツ文学)



役員会の様子 (H25/5/18)

学生数

人文学部

(平成二五年一〇月現在)

	人文社会学科	言語文化学科	合計
1年	99人	89人	188人
2年	101	93	194
3年	101	96	197
4年	123	118	241

人文科学研究科

	地域文化専攻	言語文化専攻	合計
1年	1人	2人	3人
2年	3	4	7

人文学部教育職員紹介

(平成二五年一月現在)

○人文社会学科

学部長(併)  
教授 根ヶ山 徹

哲学・思想コース

教授 高木 智見  
教授 脇 條 靖 弘  
教授 Alan Djumali  
教授 柏木 寧子  
教授 藤川 哲  
准教授 周藤 多紀  
准教授 栗原 剛  
准教授 村上 龍

歴史学コース

教授 橋本 義則  
教授 馬 彪  
教授 田中 晋作  
准教授 滝野 正二郎  
准教授 藤永 康政  
准教授 真木 隆行  
准教授 村田 裕一  
講師 池田 勇太  
講師 石田 俊

社会学コース

教授 湯川 洋司  
教授 坪郷 英彦  
教授 横田 尚俊  
教授 高橋 征仁  
准教授 速水 聖子  
准教授 岡邊 健

○言語文化学科

日本語学・日本文学コース

教授 林 伸一  
教授 平野 芳信  
准教授 和田 正弘  
准教授 森野 千佳  
准教授 尾崎 千佳

中国語学・中国文学コース

教授 阿部 泰記  
教授 富平 美波  
教授 根ヶ山 徹  
准教授 更科 慎一

英語学・英米文学コース

教授 岩部 浩三  
教授 太田 聡  
教授 宮原 一成  
准教授 池園 宏  
講師 赤羽 仁志  
講師 メドロック 麻弥

ヨーロッパ言語・文学コース

教授 本田 義昭  
教授 Hintereder Binde Franz  
教授 武本 雅嗣  
准教授 下崎 正利  
准教授 De Boissieu Michel

言語情報学コース

准教授 Phillips John David  
准教授 乾 秀行  
図書館司書養成課程  
准教授 松田 泰代

○新任教員挨拶

着任のご挨拶



村上 龍

平成二四年一〇月一日付で着任いたしました村上龍と申します。人文社会学科哲学・思想コースにて研究・教育に携わっております。この場をお借りして鴻文会の皆様にご挨拶させていただきます。どうか宜しくお願い申し上げます。

コースのなかで私が担当いたしましたのは美学という分野です。美学とは、芸術およびその周辺なる事象について考察する、哲学の一分枝です。私自身は研究のうえでとくに、現代フランスの美学的な思索を掘りおこすことを専門的に手がけています。また教育のうえでは、講読・演習において古典的ならびに現代的な美学上のテクストを読みすすめる一方、概論・特殊講義ではおもに映画やTV番組などの映像に手がかりを求めつつ、これを具に見つめるなかから学生とともに美学的な問いを立ちあげてゆく、そのような講義を行っております。

私事にわたり恐縮ですが、私は神戸で生まれました。小学校は大阪、そして中高時代には名古屋へと移り住み、大学進学後は一貫して東京に居住いたしました。そのように私はひたすら東へ東へと転居しつづけたもので(細かいことを申せば、東京のなかでも三鷹、池袋、三河島と徐々に東進いたしました)、山口大学への赴任が決まり一転して西へと、それも出生地をまたぎ越してなおも数百kmもの距離を踏破することになりました。さいには、なんと不思議な感慨を覚えました。今でも鮮明に記憶しております。

そのようなわけで、私こと中国地方に居構えるのも初めてなら、いわゆる政令指定都市な

らざる街に暮らすのも初体験という体たらくでしたが(そういえば着任直後でしたか、昨年度いっぱい退任された田中誠二先生からは、「村上くんはシティ・ボーイだね」というお言葉を頂戴しました)、着任から一年をへた今現在、私は人生をつうじて最高の暮らしやすさを実感しております次第です。と言いますのも、ここ山口では仕事や遊興、文化的活動、レクリエーションをも含めた生活上のあらゆるものが数km圏内に収まっていて(そのうえ、温泉まである)、自乗車の一台中あればほぼすべての用が足りてしまいます。恥ずかしながら、このような環境に身を置きますのは人生において初めてのことでした。しかしあらためて考えますに、むしろそれが生活の基本型と言えましょうし、かかるコンパクトさが街というものの本来のすがたでもありましょう。このたび、山口という街で研究・教育に携わる機会に恵まれましたことは、私の望外の喜びとするところでございます。

この望外の喜びをかみしめつつ、創基以来二〇〇年ちかくの歴史を誇る山口大学のさらなる発展のために貢献することが、研究者・教育者としての私に課せられた責務ということになります。私が専門といたします現代フランス哲学・美学のフィールドにモリス・メルロ・ポンティという思想家がおりますが、彼らもつばら絵画史を念頭におきながら、歴史というものを、先人からの呼びかけと後人によるこれへの応答によって織りなされる網の目として論じています。あまりに豊かな山口の歴史を前にしては、ともすれば自らの非力にただただ恥じ入る思いばかりが先立ちますが、非力ながらも先達の呼びかけを聴きとるべく耳を最大限に研ぎ澄ます所存でございます。どうか皆様、ご指導ご鞭撻のほど何卒お願い申し上げます。

(哲学・思想コース 准教授)



よろしくお願ひします



池田 勇太

昨年一〇月一日に着任してより一年が経ちました。この一年間は授業の準備や本の刊行などに追い立てられ、その傍らでこつこつ研究室に運び込んだ本を人文学部棟の改修にともなってまた運び出したり、さまざまな行事や会議に参加したりしている間に過ぎてしまいました。いま省みて、教育が必ずしもうまくできていないと言えず、また研究もあまり進んでいないことに忸怩たる思いですが、このあたりで立て直しをして、自分なりの仕事をやっていきたいと思っています。

前職は長野県飯田市にある飯田市歴史研究所という、全国でも珍しい市立の研究所で研究員をしていました。この研究所では地域の歴史資料を調査・発掘して整理・公開し、またそれらを研究して、成果を出版したり講座を開いたりする活動をしていました。信州南部の南アルプスを望む谷あいの町で、地域の人々に密着しながらその土地の歴史について学べたことは、私にとつてとても楽しい時間でしたし、また得難い経験でもありました。

研究面では、古代史から現代史までのさまざまな形態の歴史資料に触れることができたのも有り難いことでした。日本史のように蛸壺化の進んだ研究領域では、自分の専門外のことにはたいへん疎くなつてしまいがちですが、仕事では自らの得意不得意など扒ぶことなく歴史資料に目を通すことになりましたので、とても勉強になりました。

また、限られた地域の歴史を調査したこと、土地にも人にも歴史が刻まれているという、ある意味では当たり前の事実が、まざまざと感じられるようになりました。それらは大きな歴史とも無縁ではなく、といつてそれに回収

されるだけのものでもない、固有性を持った歴史で、それらを自分の言葉で分析していく歴史研究の作業が、ずっと身近なものに感じられました。

歴史の調査研究にもいろいろなお仕事があるのですが、私の場合は果樹畑や田んぼに囲まれたお宅にお邪魔して古文書を借り受けてきたり、お年寄りからオーラルヒストリーを聞き取ったりという仕事がいずれかと言えば好きで、しばしば外へ出かけては多くの方にお世話になりました。講座を開いてもゼミナールを開いても年配の方がほとんどですので――山間の地方都市だということもありますが、これは全国どこでも同じようです――、若輩の自分は教えてもらうことばかりが多かったように思います。総じていえば、育ててもらったという感があります。

山口大学人文学部へ就職したことは、そういうわけで、大きな環境の変化でした。再び書齋の仕事の比重が増し（といつて図書館は閉まっていたいですが）、自らの専門とする研究に戻ってきました。前職の経験が幸いしてか、学生たちには、高校で教わった教科書のような歴史からはいったん離れて、なるべく多様な歴史資料に幅広く触れてもらい、一般の人とも接して、自らの目で見、頭で考えてもらうことが大事だという信念を持つて接しています。

もともと、若い学生は以前に私が接していた年配の方々のように、これまでの人生経験のなかでさまざまなものを身に付けてきた方たちと違い、まっさらな生地を持っています。また目に見えて急速に学習が進むので、良質のものをきちんと与えることができているのかと自己を省み、責任の重さを感じる日々です。若輩の未熟者ですので、種々皆様からの御指導をいただければ幸甚に存じます。

(歴史学コース 講師)



ごあいさつ



石田 俊

本年度四月より、人文学部歴史学コースに講師として赴任しました石田と申します。専門は日本近世史で、特に江戸時代の天皇・朝廷について研究してきました。もともと私は北海道の生まれで、小さいころに親の都合により幾度かの引越をしましたが、不思議と本州の西側に行く機会はありませんでした。中学からは関西に定着し、大学・大学院も京都、研究対象も京都と、特に山口にゆかりがあったわけではありません。将来に対するぼんやりとした不安を抱えながらも、せわしなく行き交う人波にもまれつつ、気ままな研究生活を行ってきました。

そんな私にとつて、山口の豊かな自然と伸びやかな人々は全くの別世界です。しかし、着任当初の若輩に自然を満喫する余裕があるはずもなく、この半年は実に慌ただしく過ぎていきました。授業の準備や学生への対応、大学運営への参加など、全てが新しく、試行錯誤の連続でした。とはいえ、これらについては周囲のみなさまのあたたかい支えもあり、何とかクビにならない程度の失敗ですんでいるようです。ただ、自身の生活力の無さだけは如何ともなりません。実は一人暮らしをはじめとあり、洗濯機の使い方から夕食の支度まで分からぬことばかり。面倒くさくなつてコンビニ弁当やインスタント食品ですませると、日本史の他の先生から「ちゃんと食べているか、栄養とっているか」とオカンのような心配をされる始末。学生の方がよほどしっかりしている、と我ながら苦笑する日々です。

慌ただしさという点でいえば、人文棟の耐震工事が重なつてしまつた影響もあるでしょう。四月、前任の田中誠二先生から研究室を引き継いで息つく暇もなく、六月には仮住まいのプレ

ハブ棟に移ることになりました。私は授業の準備や学生との相談のため遅くまで研究室に残ることが多いのですが、夜のプレハブ棟に一人たずんでいると、自分は本当に就職できたのか、これは何かの夢ではないのか、そんな感覚にとらわれることがあります。その意味では、再建なつた人文棟に移る来年四月にこそ、研究・教育におちついて取り組めるようになるのかもしれない。従来の研究課題をさらに深めるとともに、山口を統治した萩藩の研究や、雄大な自然に生きた地域の人々の研究など、さまざまな課題に徹力を尽くしたいと思ひます。

学生と接していても、今はまだ「先生」ではなく「先輩」のような感覚が強く、さぞかし頼りなく映っているのではないかと思います。他の先生方のように威風堂々としたものだと思ひつつ、そんな自分には似合わない、とも考えます。学生に「社会の懐の深さ」を示すためにも、こんなのが一人ぐらいいいても良いのかもしれない。

(歴史学コース 講師)



秋色のキャンパス

平成二五年度  
山口大学人文学部  
生涯学習事業

山口大学人文学部は、地域社会との交流を深め、幅広い年齢層の豊かな教養の保持と知的向上のために、今年度、次のような事業を行っています。

(一) やまぐちサタデー・カレッジ(公開講座)  
人文学部の特色を生かした公開講座として平成一三年度に始めました「やまぐちサタデー・カレッジ」も、お陰様で今年一三年目を迎えました。今年度は前期一講座、後期一講座の計二講座を開講し、総計六〇名ほどの方々に聴講いただきました。山口市周辺だけでなく、県内の遠方からの受講者もいらっしゃいます。

前期(五月二五日〜六月一五日)  
会場 山口大学経済学部教室

高橋征仁教授

「なぜ『正義』は、人によって違うのか」



- 1 青年期における道徳性の揺らぎ
- 2 道徳性は理性の産物か?
- 3 道徳性は進化の産物か?
- 4 テストステロンと道徳性

後期(一月三〇日〜二月二一日)  
会場 山口情報芸術センター・多目的室

藤川 哲教授

「西洋美術史入門―ルーヴル美術館を身近に」

- 1 ルーヴル美術館の歴史とドゥノン翼2F…イタリア・ルネサンス
- 2 ドゥノン翼2F…イタリア・ルネサンス
- 3 リシュリユ翼3F…北方ルネサンス
- 4 シュリー翼3F…フランス絵画



来年度も前期・後期に開講する予定です。詳細は、三月頃発行されます受講案内をご覧ください。

(山口大学地域連携推進センター、  
電話083193315059  
<http://www.ext.yamaguchi-u.ac.jp/>)

(二) 山口大学公開講座(防府市)  
昨年度から防府市の生涯学習事業に参加することになりました。九月二八日(土)と一〇月五日(土)に防府市文化福祉会館にて次の講座を実施しました。

「ことばの世界」  
内容は日頃の生活の中ではことばは空気のような存在で、その特徴や性質は意外と知られて

いません。今回は、人文学部の教員四名が身近な言語表現を取り上げたり、珍しい言語を紹介したりしながら、ことばの世界を分かりやすく解説しました。

九月二八日(土) 九・三〇〜一・〇〇

武本雅嗣教授「言語表現の不思議を読み解く」

一・一〇〜一・二四

和田 学准教授「ことばの仕組みをさぐる」

一〇月五日(土) 九・三〇〜一・〇〇

乾 秀行准教授「ことばの変化」

一・一〇〜一・二四

富平美波教授「漢字という文字について」

(三) 出前講義

山口大学では、大学教員が各地の学校に出向いて専門的な内容をわかりやすく講義する、いわゆる「出前講義」を実施しております。今年度、人文学部教員が出講した出前講義は、山口県内の高校を中心に、計二件ありました。

来年度も、今年度同様、地域社会の要望に応じてまいります。教員の講義できる領域などを掲載した資料がありますので、お気軽にお申し出ください。

(山口大学地域連携推進センター、  
電話083193315059  
<http://www.ext.yamaguchi-u.ac.jp/>)

(四) 開放授業

大学の授業そのものを一般の方に開放する「開放授業」はエクステンションセンターの事業として平成一八年度から始めました。人文学部では今年度計四件の授業を開放しました。科目名や科目数などは未定ですが、来年度もいくつかの授業を開放する予定です。詳細は地域連携推進センターのホームページなどをご覧ください。

(山口大学地域連携推進センター、  
電話083193315059  
<http://www.ext.yamaguchi-u.ac.jp/>)

	学部卒業	大学院修了
建設業	1人	
製造業	8	1
情報通信業	8	
運輸業・郵便業	4	
卸売業・小売業	20	
金融業・保険業	11	
不動産業・物品賃貸業	1	
学術研究・専門技術サービス業	2	

	学部卒業	大学院修了
宿泊業・飲食サービス業	5人	
教育・学習支援業	12	2
医療・福祉	8	
複合サービス事業	2	
サービス業	4	
公務	26	1
上記以外	2	
進学	8	1

平成二四年度  
学部卒業生・大学院修了生の進路状況

# 第一回 山口大学 ホームカミングデー 開催

平成三十五年一月三三日、山口大学吉田キャンパスにおいて、ホームカミングデーが開催されました。卒業生を母校に招き、教員、在学生と語らいの場を作ることを目的とし、継続して行うことで、卒業生と大学、卒業生同士のつながりの輪を広げていこうとするものです。これは、山口大学では初めての試みです。



主会場の共通教育棟一番教室では、人文学部平成一二年卒業の伊藤愛さんが司会を務め、丸本卓哉学長の挨拶と大学の概要説明、経済学部二年牧野篤士君からの歓迎の挨拶の後、卒業生二名による記念講演がありました。

妹尾信夫氏 経済学部 平成元年卒

日立金属(株) 高級金属カンパニー

工具鋼統括部長

(元ニューヨーク支局長代行)

「ビジネス界から見たグローバル化」

阿部玲子氏 工学部 昭和六三年卒

(株) オリエンタルコンサルタンツ

GC事業部 軌道交通部部長

「どぼじょ」の挑戦」

講演終了後、人文学部卒業生は、人文学部小講義室に場所を移し、人文学部交流会に参加しました。

根ヶ山徹人文学部長の挨拶に続き、岡光一浩鴻文会会長、卒業生を代表して山口大学情報環境部学術情報課森實彩乃さんからの挨拶がありました。その後、このホームカミングデーのために集まって下さった先生、在学生の皆さんと卒業生約六〇名が、用意していただいた温かい飲み物を口にしたが、小講義室のあちらこちらでなごやかに談笑しました。全学懇親会が予定されていたため、一時間弱という限られた時間でしたが、楽しいひとときとなりました。

他学部はさらさらでのパネル展示が主流で、こうして先生方、在校生との交流会が企画されたのは人文学部だけでした。今年度は人文学部の建物が耐震強化のために改修中で研究室を訪れることは出来ませんでした。来年度は改修も終わり、きれいに化粧なおしをした人文学部の様子を見る事が出来ます。



交流会を終えて -人文学部小講義室前にて-

共通教育棟一番教室での講演会のほか、第二学生食堂きららでの学部紹介、部活動の披露、学生によるキャンパスツアーなどたくさんさんの催しがありました。子供向けイベントも用意されて、ご家族で参加されても楽しめるよう配慮されていました。

来年も秋に開催される予定だそうです。来年のホームカミングデーでお会いしましょう。

人文学部広報企画部会ジュマリ・アラム先生が今回のホームカミングデーをきっかけに、卒業生の連絡網を作られ、メーリングリストにより人文学部の情報提供やニュース配信をされています。メーリングリストへの登録をご希望の方は、左記のアラム先生のメールアドレス宛てご連絡下さい。

djumali@yamaguchi-u.ac.jp

(文責 渡邊 早苗)



全学懇親会でヤマミィと



第二学生食堂きららでの人文学部紹介

同窓賛歌

私の生活と生涯学習



菊谷 進

この秋一〇月一日(金)、毎年開いている「山口大学東洋史懇談会」を山口市神田町RKR山口あさくらで行った。参加者は合計六名の小グループです。しかし毎年この会の集まりを心待ちにしており、集まると色々な話題で盛り上がりま

この場で先日、ホテル松政で催された鴻文会総会の様子を説明してみました。その時に写った集合写真を開くと皆んな諸先生方の姿を目にしてその頃の思い出話に花が咲きました。そして教えを受けた先生方の話題、評価された自分の成績、友人との交流などは書きませんでした。会報「鴻文」三二号で同窓会に対する助成要綱が掲載されています。来年度は当懇談会も申請したい。そしてこの会が増々盛会となることを提案してみました。懇談会は二時間半後にしめ、来年の開催を約束して別れました。

さて、振り返ってみますと、大学を卒業してはや五五年が過ぎ去っています。教員・会社員で四一年の年月を経て勤めを終えたのは平成一年でした。自由の身になり今後をどう過したらいかを考えました。その頃学習への想いも高まっており、まず山口大学で学んでみたいと思えました。そして人文学部科目等履修生として一年間、キャンパスで過しました。ここで学んだことがその後の私の過し方に大きな力を与えてくれました。

その後生活の中に生涯学習のひとつ・二つとり入れることを考えました。数年を経て平成一九年に「大内文化探訪会」(事務所・山口市湯田温泉)に入会しました。この会は大内文化を中心に文化遺産などの文献

的研究・県内外の遺跡・文化財などの現地探訪・学習グループを招いて公開講演を行う。会員の研究発表・さらに会誌の発行・そして大内文化に関する諸団体との交流など大内文化の発掘・高揚に尽力している団体です。そして会中の研究グループの一つ「史料を読む会」に入りました。ここで太平記・応仁記など数多くの史料研究をしました。最近では鎌倉幕府の事跡を日記体に編述した「吾妻鏡」を皆で学習しています。ここでは会員を数班に分け、各班持ち廻りで割り当てられた箇所を学習し、研修日に成果を発表する。そしてその内容に対する質疑応答の形でお互いの理解を深めていくものです。

さて同窓に六年も籍を置くといつかは役が廻ってくるものです。私も本年から編集部の責任者となりました。例年の会誌を六月に発行したその直後、今年には「大内文化研究要覧」の修正・増補の改訂発行を行うことに決まりました。この「大内文化研究要覧」は平成七年度山口県文化振興財団の助成を得て、それまで取り組んだ大内文化に関する多くの研究の事項を整理して「大内文化研究要覧」としたものです。初版から一八年が経過しています。この間に二度の改訂版を発行したのですが、今回三度目の内容の見直しと、一〇年間の追加記録の必要が起り改訂発行となるのです。

冊子を開くと探訪会諸先輩の編集作業の苦勞が見えて来ます。その内容に劣らぬものが出来るか大変不安の感じもあります。しかし現会員の協力を頼りに自分なりの内容にしてみたいと考えています。微力な私ですが精一杯努力してみたいと考えています。

末筆ながら私も同窓生の一人として山口大学の今後の発展を心から念じている次第です。(文理第六回卒・東洋史学)



二人の恩師



山本 博信

学校を出て五〇年以上となると、学生時代の旧師はどなたも死出の山を越えられて久しく、日頃の記憶の領域からも消え失せてしまうのが常である。だが三〇年も前に相繼いで物故された上田・田中両先生は私にとってはそうではない。コッコツと床を踏む靴音が近づくや、「ハイ、どうでしょうか?」と、俯いた顔の下

に手を差し伸べられる Jeaperson と Shakespeare の「ミキさん」こと田中美輝夫先生と三行授業と批判的な仲間もいたが、「それはどういふことか!」とピストルを烈しく連射される Song や Hugel の前衛沸騰詩人上田敏雄先生は別である。今ここでその仔細を述べる気も暇もないが、上田・田中両先生は私にとっては単に学生時代の旧師に非ずして、人生の師であり恩人なのである。奇しくも今年はその両恩師に係る行事二つに、幸運にも直接的に関与し実行でき、積年の願いの一端を果たした思いである。

その一つは「田中美輝夫先生没後三〇周年墓参会」実現であった。かねてより折に触れ、私は区切りのよい年に先生の年忌祭を同門の仲間と呼びかけようと考えていたが、自らの都合や病に阻まれ、また生来の怠惰により、念願を果たせないでいた。今年には田中先生が身罷られて丁度三〇年目に当り、それに私はすでに先生の没年齢と同じ七三歳の老齢に達していることを思えば、今年において実行可能な時はないと判断した。私は先生の墓前に坊主を呼び墓前祭の簡単な法要の真似事を行なうことを決心した。命日の五月二十九日に墓参会を行うことを、独断と偏見で一〇名ばかりの英文科同門諸氏に発起案内した。健康上その他諸事情から参会できたのは内野真二(昭三五年卒)、安永稔(昭

三六年卒)、西村崇夫(昭三九年卒)の三氏であった。墓所は岡山市郊外の山の斜面を切り開いた湯迫(ユバ)共同墓地内にあり、意外にも先生の遺骨は「田中家之墓」に合葬されていた。雨上りの強烈な日差しが湿っぽく照りつけ、土地の古刹浄土寺枝川住職の読経の音が鈍く墓石に反射して眼下に広がる田園へ蒸し暑く流れ渡る中、我々は在りし日の師を偲び、冥福を祈った。共同墓地の細い急な石段を下りながら、私は先生が破顔してカラカラとおっしゃるのが聞こえる気がした。「山本君、なにを今さら!君ももう年だから、こんな墓前祭なんか暇つぶしはよして、さっぱりと整理を済ませて浄罪界へ来る準備でもしたらどうかね」と。

いま一つは「シュルレアリスト詩人上田敏雄展示会」開催である。上田敏雄先生は、私が卒業した同じ年の昭和七年に山道を退官し、その年創立された宇部高専へ転出して校歌を作詞された。私はその先生の校歌作詞作業に個人的に多少の係わりをもち、その後高専に勤務して上田先生と研究室を共にした。そのような関係で、昨年創立五〇周年を迎えた宇部高専の記念誌に寄稿を依頼され、詩人上田敏雄と校歌作詞過程を紹介する一文を寄せた。それが詩人上田敏雄を知る切っ掛けとなり、高専学内に特別展示室が常設され、今回、詩人上田敏雄展示会開催の運びとなった。この一月二四日にオープンング・セレモニーが行われるばかりである。

おそらくはこの詩人上田敏雄展は、単独では日本で最初の画期的な企画である。展示設計から展示品、揭示物、詩誌、詩集などのコメント・解説まで手伝えたことは私の勉強ともなり、恩師への恩返しにでもなったかとうれしく思っている。先生は昭和初頭、超現実主義詩人の鬼才として華々しく活躍した後、終戦までの長い一時期の沈黙を破って戦後山口より詩活動を再開し、昭和五七年に世界するまで求道者のように上田詩学構築に精進された。昭和初期の詩壇へ強烈な刺激を与え、その後の現代詩の多様性と主知性のもととなった詩人上田の戦後の進化した詩観はキリスト教原理の導入により益々難解になり闇に埋もれんとしている。

こうした上田敏雄や田中美輝夫にかぎらず、元・現教官や卒業生の逸材を発掘・保存・周知・活用をする装置を創って、天下に山口大学の矜持を示すことが、「創基二〇〇周年記念基金」事業などより余程大切でないかと思う。そうすれば、鴻文会総会だって大盛況になるに違いない。

(文理第一〇回卒・英米文学)

### 山口大学に縁してよかった



酒井 由紀

大学を卒業して約二〇年。卒業後、佐賀の穀物の卸売会社の株式会社森光商店に一三年勤め、現在は実家の長崎で、両親と共に、島原手延素麺を作っています。

同期生である山口市在住の和崎さん(旧姓村岡さん)のおかげで、同窓会の折には、山口を満喫しています。むっちゃん、いつもありがとう。断るのが苦手な性格が災いしたのか、またはのりがよい素直な性格が幸いしたのか、会報に寄稿させていただくことになりました。

山口大学に入る前のことですが、受験の際、母校の島原高等学校の久原先生が引率役で、先生は、山口大学で考古学を学ばれたそうで、山大までの寒道のりをみんなで歩いているとき、山大をしきりに誉められており、私は「先生、なんだか山口が好きになってきました。ここに通いたくなってきました。」といい、「そうか、そうか!」ととても喜んでくださったのを覚えています。

口に出したことは、現実となり、私は社会学を専攻し、小谷典子先生にお世話になりました。先生は、着物で、お茶の会を開いてくださり、お忙しい中、私たち学生と交流を心がけてくださっていたことを思い出します。卒業後、

先生の最終講義、会報の文章、「やまぐち社会学者のひとりごと」などで改めて、先生を知る機会が得られました。これも同窓生の絆となる会報の発行があるおかげであると感謝申し上げます。

卒論は、横田先生にお世話になりました。先生は、雲仙普賢岳噴火災害を他大学の教授と研究されており、卒論のテーマに選んだ際、現地で合流させていただきました。いろいろな方を紹介していただきました。どうにか卒論が完成し、卒業させていただけただけに、本当に感謝申し上げます。雲仙の災害以降、多くの災害が発生しました。福島には沢山の友人がおり、今でも余震があり、そして放射能の影響で、子供たちは、外で思い切り遊べないそうです。友人の声が、震災をより身近にしてくれました。

木下先生とも同窓会で何度かお話しする機会をいただきました。先生は、人生は人との縁次第だと、いろんなお話しをしてくださいます。人生で縁は大切だと思います。山口大学での縁がつかない方のお一人に、高橋賢一さんという方がおられます。日本のきもの文化の復活を願う活動しているきものデザイナーです。その方の講演で「人生の終末を迎えた自分に、なんと声をかけますか?」と聞かれ、わたしは、「がんばったね。」と声をかけると答えました。高橋さんは、「それなら、いまこの瞬間から、死ぬまでずっとがんばる人生になる。僕は、人生楽しかったなあ!と声をかけたから、いまこの瞬間から楽しいと思える人生にしたい」とおもう。」と言われ、どんな人生にしたいかは、今をどんな思いですすかにかかっている、シンプルでいいなと感じました。最近「おしん」が映画化されましたが、これを見ると我慢や忍耐を美德とし、「おしんと比べたら:」と思わせます。ちなみに「おしん」は、日本よりも貧しい国で、大ヒットしたそうです。

現在、生まれ育った地元で、素麺を作りながら、日本のきもの文化を応援しています。両親と一緒にいられること、大好きな民族衣装のきものを日頃から簡単に着ることができて、本当にしあわせです。きものは日本人であることの

誇りと女性であることを思い出させてくれ、心を豊かにしてくれます。

山口大学では人との縁がありました。今後、新たな縁を結びつかけとして同窓会などに、タイミングをあわせて、期待せずに気軽に足を運びたいです。

山口大学と縁ができて、本当によかったです。

(人文第一三回卒・社会学)

### 研究室同窓会・同期会だより

### 内山俊彦先生の傘寿をお祝いする会

秋竹 泰雄

二〇一三年五月二十四日、緑風の薫る京都で、「内山俊彦先生の傘寿をお祝いする会」が開かれましたので、ご報告させていただきます。

内山先生は、一九三三年神奈川県のお生まれで、本年六月に傘寿を迎えられました。

一九六〇年代から一九八〇年代にかけて、山口大学文学部及び人文学部において中国哲学の教鞭を執られました。これらの時期に先生から教えを受けた元学生達が相集い先生の傘寿をお祝いし、旧交を温め思い出話に花を咲かせることとなりました。

この会の開催に当たっては、石川兼彦(七〇年卒)並びに富田一彦(七四年卒)両氏が発起人となり、内山先生が現在、大津市にお住まいであることもあって、関西在住の卒業生が集まることとなりました。また、参加の中心は中国哲学専攻の元学生ですが、先生の講義の対象が中国哲学専攻の学生のみならず、中国文学や国文学専攻の卒業生も居りますので、知る範囲で参加の呼掛けがなされ、中国文学の仲尾氏(七五年卒)が参加されました。

今回、内山先生の傘寿をお祝いする会において、一つだけ大きな心残りがありました。それ

は、数年前に亡くなられた先生の奥様にご出席頂けなかつたことです。先生同様奥様には我々が学生時代、お宅へお伺いする度に細かなお心遣いでもおもてなし頂いたことが思い出されま

す。さて、祝宴は今回の仕掛け人である富田一彦氏の司会で、出席した卒業生各々の先生への祝辞と先生との思い出話、自身の近況など語りつつ、和やかに進んでゆきました。

私自身のことをお話すれば、決して真面目で勤勉な学生ではなかつたにもかかわらず、卒業直後に大病を患い入院したことを聞きつけ、心配し激励して下さったことなど、約四〇年を経た今でも有難く思い出されます。

それぞれの卒業生の近況や思い出話を聞きながら先生は昔日と変わらぬ抜群の記憶力で、教え子各人の学生時代の姿を思い起こさせてくださいました。



私は皆さんの思い出話をお聞きしながら一つ気づいたことがあります。それは、私も含め各人が人生の岐路ともいふべき時に、先生は必

「君たち、そんなことも知らないのか！」  
 (文理第二二回卒・中国哲学)

### ドイツ語学ドイツ文学 研究室同窓会報告

林 久博

八月一七日一九時より二三時近くまで、ドイツ語学ドイツ文学研究室の同窓会が湯田温泉の「心和食まほら」で開催されました。愛知県に住んでいる私は当初、遠方を理由に出席しないつもりでいました。そんな折、岡光一浩先生から「今度の同窓会、来ますよね？」というメールが届いたのでした。メールの行間からは「必ず来なさい！」という強い含意を読み取ることができました。

まず一時間ほどビールを飲んだ後で読書会を始めたものですが、酔っ払っていてもドイツ語の勉強をする気になれたのが不思議です。ドイツ語で生計を立てていきたいという、当時まだ若かった我々の(無謀な?)決心を、先生は温かく支えてくれたのだなあ、と今更ながら思います。(こうして私は今名古屋の私大でドイツ語を教えています。)

さて、瞬間に予定時間は過ぎ去り、今回は内山先生の米寿をお祝いする会で再会することを誓い、散会となりました。その時まで内山先生におかれましては、ご壮健で我々不肖の弟子達をご叱咤ください。

最後に、内山先生から今回の祝宴に対する謝辞と、これまでの教員生活を振り返ってのお話しを頂きました。先生が出会った多くの人々の中で、忘れ得ぬ三人の方の生き方を通じ、時流に流されることなく、自分自身が立っている場所を自ら考え行動することが大切であると我々を鼓舞激励してくださいました。

岡光先生のお誘いを断ることなどできるはずもなく、私は新幹線に飛び乗ったのでした。先生との思い出を振り返ってみると、学部四年生のとき「夜の読書会」と称し、深夜までドイツ語の文章を先生と読んだことが忘れられませんが、月に三回はこの会を行っていたでしょう。同級生の内田君、一年下の小崎君とともに、この会はお互いが別々の大学院に行った後も三年ほど続きました。まず一時間ほどビールを飲んだ後で読書会を始めたものですが、酔っ払っていてもドイツ語の勉強をする気になれたのが不思議です。ドイツ語で生計を立てていきたいという、当時まだ若かった我々の(無謀な?)決心を、先生は温かく支えてくれたのだなあ、と今更ながら思います。(こうして私は今名古屋の私大でドイツ語を教えています。)



同窓会のこと話を戻しましょう。出席者は一〇名で少数ではあったものの、渡邊信生先生、岡光先生、本田義昭先生、ヒンターエーダー、エムデ先生、そして飛び入りの社会学の



### 同窓会で「新しい風」を 巻き起こそう

吉富 千恵

私が初めて同窓会に参加させて頂いたのは、平成二四年度社会学同窓会総会です。平成六年三月に山口大学を卒業してから、なんと一八年目にしてやっと…。

それまで「鴻文」は拝読させて頂いておりましたし、同期の掲載文を発見すると、嬉しさと共に自分も頑張らねば!と、奮起してしまいました。しかしながら、同封の同窓会案内のハガキには、「出席」とマルをして投函するまでには至らなかったのが現実です。そんな私を同窓会へと導いてくれたのが、在学中よりずっと親交を続けていた友人です。

卒業し、「社会人」として日々奮闘し、悩む日々。自分の中でそれらが消化しきれなくなってしまう時、何ヶ月、時には何年も経ってしまっているのに、ふと久しぶりに連絡。その時決して目の前にはある悩みを相談する事はなくても、お互いの近況を話すだけで心に励みや安らぎ、ひらめきという小さな灯りが灯っていました。そしてある時「鴻文会総会に出席したよ。」と、友人から報告があったのです。出席した同期の名前が何人か挙がり、懐かしい思いにかられました。「会いたい。」と。

私は、三〇代になってから、あるご縁により「幼児」と仕事上関わる機会を得、それがきっかけで資格を取り、保育士として新たな道を歩み始めました。子どもでも大人でも、人と人との相互作用や、規模の大小はどうであろうと、「集団」の中での人の行動に着目できるのも、(決して真面目な学生ではありませんでしたが…)「社会心理学」を学んだお陰で、仕事上で大いに生かされていると思っています。

「仕事」に対するやりがい、生き甲斐を見つけて、一つの道筋を決めて経験を積んでいく中、それはそれでもっと突き詰めた将来の方向性などまだまだ悩みは尽きません。その様な状態

木下謙治先生を交え、会は非常に盛り上がりました。出席者の年代には幅がありました。学生時代を山大で過ごした同志」という同窓会独特の連帯感があつて、活気あるものとなりました。久々に飲んだ五橋や長州美人といった山口の地酒は格別なおいしさでした。(先生方以外の出席者は山口俊治(文一四回卒)、井上恵(人一二回卒)、内田哲志・林久博(人一五回卒)、小林由美子(人二二回卒))

湯田で痛飲した翌日、私はレンタカーで山大周辺を回ってみました。山大周辺はすっかり変わってしまいました。派手な色彩の看板を立てたチェーン店が目立ち残念な気がしましたが、樫野川でバーベキューをしたこと、三平で酒を調達してから誰かの家に集まってよく鍋をしたこと、卒論提出前には研究室に泊まり込んで執筆したこと…などなど、当時の思い出が一気に蘇ってきました。前日の同窓会でも、出席者それぞれが先生を取り囲んで、過去に忘れ去られていたはずの出来事を生き生きと思い出し、再現していました。自由で、無我夢中に生きた大学時代の思い出を、それぞれが心の底で大切にしていた、そんな印象を強く受けました。

ところで、この夏「半沢直樹」というドラマが大ヒットしたことはみなさんよくご存知でしょう。「倍返し」という言葉が流行りましたが、私はこのドラマの別の言葉に惹かれました。主人公半沢の大学時代の同級生である近藤は、銀行から関連企業に出向しますが、その出向先で彼は疎外されてしまっています。追い詰められ出口を見失った近藤に対して、半沢は「大学時代を思い出せ!」と言って彼を強く鼓舞します。ただ自分の信念に従い、無心に一事に打ち込んだ大学時代の自分を取り戻せ、と半沢は近藤に言いたいです。我々も自分を奮い立たせるために、ときどき立ち止まって「大学時代を思い出せ!」が必要なのかもしれません。(人文第一五回卒・ドイツ語学・ドイツ文学)

だった四〇歳の時、友人の同窓会出席の報告。母校を巣立つてから、今はそれぞれの場所で活躍する仲間や諸先輩方、恩師との再会で、新しい発見ができるのでは、と一八年ぶりの同窓会に出席しようと決めました。久しぶりの再会でしたが、あつという間に時間旅行。一日一日を昨日の様に思い出しました。なんといつても自分の中には確実に山口大学で過ごした魂が宿っていると感じたひと時でありました。



そして、平成二五年、八月一七日。湯田のホテル松政で開催された「鴻文会総会」にも勿論参加させて頂きました！総会後の徳野先生の講義にはぐいぐいと引き込まれ（購入した本には小谷先生の後押しでサインもして頂きました。）懇親会では、先生方とスリッパ卓球大会で一戦交え燃え、諸先輩方、後輩との話に大いに花が咲き、大変楽しく、有意義な時間を過ごしました。その後は同期の友人達と「千人湯」で入浴。ほぼ二〇年ぶりでも構える事は全くなく、まさに「裸のつき合い」。学生時代、研究室で道後温泉に行った時の様々なエピソードで盛り上がりました。まだ終わりません。総会後

には「鴻文会」から会費を補助して頂き、「同期会」まで開く事ができました。現在と過去が自然に交じりながらの友との会話は尽きずあつという間に時は過ぎました。

「同窓会。」それは再会と共に、改めて新鮮な出会いがあり、その時生まれる新しい「絆」で「新しい風」を巻き起こせるものではないでしょうか。

又、母校である山口大学に思いを寄せ、親睦を深めていく事こそが、同窓会発展へとつながつていくのだと思います。

同窓会報告をさせて頂きましたが、最後に、「皆さん、是非是非 同窓会に参加しましょう！」

(人文第一三回卒・社会心理学)

### 英語学・英米文学専攻 第二一回生同窓会開催報告

岡 ゆみこ

卒業して早四〇年過ぎましたが、卒業以来、初めての同窓会を、一の坂川にホテルが乱舞する六月八日、山口市熊野町の「防長苑」で開催いたしました。

同窓会は、山口市在住のAさんの長年の希望で、今年の一月に、有志が思い立って開催を決定し、慣れない名簿作り、電話連絡、日程決定等を準備しました。和田先生にもご出席いただき、同級生一五名の内一名と国史専攻の有志一名が加わり、計一三名の参加となりました。卒業して初めて会う人も何人もいましたが、声を聞けば、あの若き日の顔や姿がすぐに甦ってきました。

先ず初めに、皆で母校めぐりをしました。当時の平川は、周りは田んぼも多く、空がとても広かったキャンパスの至る処にバリエードがはられ、全学連や全共闘のオルグ活動が盛んでした。キャンパスを歩く自分の子供たちよりも若い学生達を目にして、ここで学んだ日々を思い

起こしながら、今は緑も建物も随分増えて、大学らしい落ち着きと、貫禄が備わってきたと感じました。

以前より優しくなられた(！)お元氣な和田先生のご挨拶を皮切りに会は始まりました。今思えば、当時は四〇代の先生でいらしたのに、真摯に英文学に打ち込んでおられた先生は、不勉強な学生の私から見れば近寄りたく、予習不足の授業には出席することさえ気後れしていました。今の凶々しさがあれば、先生の膨大な知識の一端でも教えを乞いに行つたものにと、逃したチャンスは今更ながら惜しんでいます。



乾杯に続き、順番に近況報告をしました。既に、皆六〇歳を過ぎ、仕事では第一線を退いてはいても、まだまだ第二の人生を楽しみたい新しい事に挑戦する人、学生時代の趣味をまた始めた人、孫たちの世話で忙しい人、親の介護が大変な人の話等次々と、私たちの近況報告が終ると、後は、四方山話や、学生時代の思い出話に花が咲き、予定の三時間はあつという間に

過ぎ、先生をお見送りした後は、ホテルの乱舞を見て楽しみました。川べりの喫茶店での二次会も、座が大いに盛り上がりまだまだ話し足りなくて、名残を惜しみながらの解散となりました。

同窓会というのは、四〇年の長さを超えて、過去の歳月を一挙に甦らせてくれるものらしく、後日、「懐かしさでいっぱいでした」「心躍るひと時でした」「幸せな時間を有難うございました」等など、大変嬉しい感謝の言葉をいただきました。

会の中で、久しぶりに耳にし、当時辞書を引き引き悪戦苦闘した古いテキストを本棚から取り出し、ほんの数年でしたが、若き日々、先生や同級生達と、英文学の宝の一端にふれあう貴重な時間を、共有したのだという思いを新たにしました。

また全員元気で、再会できる日を楽しみにしながら、会の報告とさせて頂いていただきます。

(文理第二一回卒・英語学・英米文学)

### 「今を楽しめ (Carpe Diem)」 英語学・英米文学同窓会へ

中村 裕美

お盆休み終盤の八月一七日、あちこちで気温四〇度を超えた今夏の暑さをもとめせず、先生方と同窓生合わせて一四名が、湯田のホテルニュータナカに集いました。

田中晋先生の乾杯のスピーチは、七月末の山口・島根豪雨災害に触れて、普通に暮らせることの有り難さをあらためて深く考えさせられるものであり、無事に集まることのできた幸に一同感謝しつつグラスを合わせました。

丸テーブル二卓での歓談が始まると、人文学部耐震化工事のため研究室が二階建てプレハブの一階に仮住まい中で、暑さは二階より楽なものに悩まされている話あり、島の学校では船が欠航すると本土から通う生徒が帰宅でき

ず、島内の民家に分宿させてもらう話あり。あるいは、国際結婚した先輩に現役生が真剣に質問する場面もあり、どちらのテーブルも賑やかです。

自己紹介・近況報告では、今だから言える失敗談(山本和之先生の「コマ目の授業にしばしば遅刻し、定刻に行くと「雨が降る」と先生に冷やかされた。田中先生の午後の詩の講義で、先生の美声が子守唄に聞こえたetc.)に、覚えのある面々は大笑ってNK細胞を活性化させ、また、平成世代の活躍ぶりには昭和世代が眼を細めて、まるでわが子か孫を見るように暖かく見守りながら耳を傾けていました。



今回、じえじえええ!だったのが、先生たちの懐古談です。昭和三十七年に人文学部の前身の文理学部へ赴任された山本先生が「当時は若くて元氣ハツツ、後河原の文理学部(現県立図書館敷地内)から、終業後に男子学生と湯田まで遠征して温泉風呂に入り、しこたま飲んだ翌朝は頭がガンガン、それでもフアイト一発!で授業に行った」と武勇伝を披露されると、ご自身と同窓生でもある田中先生は「山本先生の山

大での記念すべき初年度は、私が文理学部に入学した年でもあり、当時の私は髪ふさふさの一年生だった」と強調され、お二人に触発されたのか、現役の太田聡先生までが「山口に来た二七歳の頃は学生と間違われてサークル勧誘され、事務の人には「学生はコピー機使っちゃダメ」と言われた」など、何だか「あの頃は」自慢大会のような状態に。先生方がとても身近に感じられたひとときでした。

同窓会というのは、普段は忘れていた大学時代のキラキラした自分に戻れる場なのですね。お開きの頃には皆、来た時よりも若々しくなっていました。若返りの場を準備してくださいました幹事の池園宏先生、ならびに他の英語学・英米文学コースの先生方に感謝します。この記事をお読みの同窓生の皆さん、次回の予定は四年後(リオデジャネイロオリンピックの翌年)です。次こそは、おいでませ山口へ!  
(文理第二三回卒・英語学英米文学)

(英語学・英米文学同窓会の案内が届かない場合は、鴻文会事務局にお問い合わせください)

### 悠久の時を越えて 〜東洋史研究室同窓会〜

神崎 茂樹

平成二五年七月二七日(土)、東洋史研究室同窓会並びに恩師である畑地正憲先生の学位取得と著書『宋代軍政史研究』の出版をお祝いする会を博多で開催した。

一五学年、約四〇名の卒業生が集まり、久しぶりの旧交を温めた。

前回集まったのが畑地先生の御退官のときだったので、この度は約一〇年振りということになる。それぞれ卒業して一五年から三〇年が経過しているので、学生時代の面影をとどめている方々のほうが少ないような気がしたが、挨拶では「みんなかわらないねえ」という冗談な

のか本気なのか解らないような言葉が飛び交っていた。

私達が在学当時、小学生や幼稚園児だった先生の子どもさんも立派に成長していたが、当時の先生にだんだんと似てきていたので、卒業生達は当時の厳しい先生の演習を思い出し、いささか緊張していたのではないだろうか。

先生の方は、一緒に来られたお孫さんを愛する好々爺になられており、お変わりないのは先生の奥様で相変わらず清楚でお優しい(成長したなあ私)。

当時の東洋史研究室では、先生と学生達は大学での付き合いだけでなく、たびたび先生のお宅にお伺いし、バーベキューやクリスマスパーティー、お正月のお祝いとまるで家族のようにお世話になった。



思い出の味である。同窓会では、当時助教だった山本英史先生からのご祝辞と、滝野正二郎先生のご挨拶をいただき、乾杯と歓談の後、卒業生からの近況報告が一人ひとり行われた。

それぞれ卒業後いろいろな人生を歩んでおり、月日の流れを感じるものもあったが、中には、東洋史に在籍して漢文を読んだお陰で、文書を手書きしていた時代には会社の上司から「よく漢字を知っているねえ」と感心されたというものもあった。

他にも、当時の研究室でソフトボールにひたすら熱中していたことや、夜中に突然萩に行くということになり、車を走らせて何をやるでもないが、ただ海を見て帰ってきたことなどが話に出てきて、自由な時間がたっぷりあった学生時代が懐かしく思い出された。

また、当時の厳しい演習時代に鍛えられたお陰で、就職して編集の仕事に携わるようになったとき、資料の選択、分析能力が身についたという話も出た。

あの頃の演習で先生が語っておられた内容が今回上梓された御本に載っていたことに気が付き、何となく感慨にふけることもあった。

同窓会是一次会のパーティー、二次会の居酒屋、三次会の寿司屋、四次会のワイン専門店、五次会の屋台ラーメンと続き、さすがに全員ではないが残ったメンバーは「胃袋だけは丈夫な東洋史」の伝統をしっかりと守ることができた。学生時代、幼かった子どもさんを馬に乗せて乗せたり、悪役になって怪獣ごっこをしたが、先生の子どもさんが立派な大人になり、今回深夜二時のラーメン屋までつきあってくれたが、五〇代になって、顔に疲労の色がありりと浮かぶかつての大学生であった私とくらべ、すっかり頼もしくなったものである。

今回久しぶりに同窓会を開き、懐かしい思い出にひたるのができたと同時に、新たなエネルギーをもたらした気がする。次の同窓会を楽しみにして、今回の同窓会報告としたい。

(人文第四回卒・東洋史学)

そして、一通り宴会を楽しんだ後、最後に皿うどんが登場するのですが、長崎ご出身の奥様による手作りの皿うどんは、今でも忘れられな

鴻文会「賛助会員」の制度に  
ご協力をお願いいたします。

鴻文会活動は、毎年度の新入生から入金される「終身会費」(一万円)をもとに行われます。

鴻文会は、同窓会総会の開催、名簿管理、会報発行、ホームページ管理などの活動を行い、最近では留学生への奨学金支給事業を開始し、活動も多様化しております。それらの活動を支える資金は、昨今の厳しい経済状況もあって、決して安心できる状態ではありません。そのような中であつて、ここ数年、卒業生会員や特別会員の皆様から多額のご厚志をいただき、本年度開催の諸活動の資金に充てることができました。ひとえに皆様のお力添えの賜でございます。ご協力ありがとうございます。活動を支えて下さった方々のお名前を左に記して、お礼に代えさせていただきます。

平成二四年度賛助会員(順不同 敬称略)  
頼住光子、多田幸子、水本孝二、藤満通、野村昌弘、大下一彦、小野博満、林紀元、山崎種三、山崎明美、上嶋美也子、高田恭子、倉重雅子、後根弘子、板屋芳子、宮藤隆夫、高橋香澄、冲中武志、水本幸二、尾崎徹、伊東敬一郎、林田美代子、濱村祐子、平田昌司、松本馨、細山田康弘、吉野まさみ、磯部薫、梅田洋二、桐原恵子、野村悦子、小篠美智子、芳野奈央、島田かおり、八田順子、平田真弓、村上勝三、吉村崇、三木允彦、松本英子、守田愉加理、小川朝子、頼住光子、小林由美子、中垣八朗、常松尊輝、住吉隆義、宮原省吾、池佳代、大谷泰子、秦紀代子、猿渡聖也、青木寛、田中伸、岡本正則、大江清子、高橋幸輔、木村比沙子、中嶋みどり、高田恭子、原文映、青木隆

鴻文会会員名簿利用規則

子、加藤久典、伊豫英城、登城孝胤、溝部忠増、倉重雅子、江川大器、田中澄子、白部文子、増谷なおみ、鳥越郎、井上真理子、井上基子、井上範子、岡光一浩、森江裕孝、菊谷進、村田和夫、岩野訓子、橋本学、村田博、福家里奈、椎野由紀子、秋村寛之、奥嶋明子、前原洋子、渡邊早苗、藤田美穂、高下洋一

- 一、会員名簿の更新(新規入会、異動に伴う)と保管は事務局で行う。
- 二、会員名簿は会員に限り開示することを原則とする。
- 三、会員名簿は、会員相互の親睦、会の発展を目的とした利用に限り使用することができ、営利を目的とした利用は禁止する。
- 四、会員名簿の開示は、直接に事務局で求めるか、郵便またはファックスで申し込み、事務局は、申し込み者が会員であることを確認して会員名簿を送付する。これにかかる経費は利用者が負担する。
- 五、会員名簿の開示申請者名簿(利用者名簿)を作成し事務局で保管する。

《住所変更連絡のお願い》

毎回たくさん郵便物が返却されてきます。

住所に変更があった場合はご連絡をお願いします。

鴻文会事務局

Fax : 083-928-4527

E-mail : fycsf998@ybb.ne.jp

研究室同窓会・同期会・地域(ブロック) 同窓会に対する助成要綱

(目的)

第一 この要綱は、鴻文会会員相互の親睦と交流の活発化を図るために開催される研究室同窓会・同期会・地域(ブロック) 同窓会(以下「同窓会等」という。)に対する助成について必要な事項を定めることを目的とする。

(助成の対象)

第二 助成の対象は、鴻文会正会員の参加者が五人以上の同窓会等とする。

(助成の内容)

第三 助成は、正会員の参加者一人当たり千円とする。ただし、二万円を上限とする。

2 同一同窓会等に対する助成は、一度一回限りとする。

3 同一同窓会等に対する助成は、毎年度は行わないものとする。

(助成の申請)

第四 助成を受けようとする同窓会等は、同窓会等の開催日の一週間前までに助成申請書(別紙様式1)に参加者名簿(別紙様式2)を添えて提出するものとする。

(助成の内定)

第五 同窓会等から助成申請書の提出があった場合、鴻文会会長(以下「会長」という。)はその内容を審査し、当該申請が適当であると認めるときは、助成を内定し、その旨を代表者に通知するものとする。

(報告書の提出)

第六 同窓会等は、同窓会等の開催日以後一週間以内に開催報告書(別紙様式3)を提出するものとする。

(助成の決定等)

第七 同窓会等から開催報告書の提出があった場合、会長はその内容を審査し、助成が適当であると認めるときは、助成を決定し、代表者の指定した口座に速やかに助成金を振り込むものとする。

(会報原稿の提出)

第八 助成を受けた同窓会等は、鴻文会の発行する同窓会報「鴻文」(以下「会報」という。)に同窓会等の開催報告を掲載するものとする。

2 会報原稿の形式は、次の各号に掲げるとおりとする。

(一) 本文の書式は、タテ一行二一字とし、分量は、全五五行以内とする。

(二) 本文とは別に、タイトル及び氏名を文頭に置き、卒業序次、卒業年及び専攻を( )内で文末に表記する。

(三) 会報原稿には、当日のスナップ写真又は記念写真を添付する。

(四) 会報原稿の締切りは、九月末日とする。

(その他)

第九 この要綱に定めるもののほか、同窓会等に対する助成について必要な事項は、会長が別に定める。

附則

この要綱は、平成二四年度五月一九日から施行し、同日以降に開催される同窓会等に対する助成から適用する。

